

「実践事例集Vol.14」(2017年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

「科学する心を育てる」

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

年少児「色水遊び」からの発見



～菜の花保育園～

(前 略)

今年度は、昨年度まで行っていた生活ベースの 3~6 歳児の縦割り保育をなくし、各年齢ごとのクラス編成を行った。それは、2 歳児から年少児へと進級してきた子ども達の「自分でやってみたい」意識が強かったことと、昨年度の終わりに行った職員会議の場で、担任より、どの年齢に焦点を当てるかが明確にならないことが検討課題として挙げられたからである。また、各年齢の子どもの発達の特徴を理解し、計画を立て一年間の保育を行ってみたいという思いが強かったためである。

昨年度の子ども達から湧き出した思いはツマグロヒョウモン育てであった。そして、そのお世話を通して様々な気づきや発見があり 12 月の生活発表会で劇を行った。その継続で、今年度は年長児を中心にパンジーの種まきから開始した。パンジーの水やりなども行い、花が咲く頃には古くなった花を摘む仕事を昨年度学んだ年長児はせつせと行っていた。しかし、ツマグロヒョウモンはなかなかやっけてこない。その幼虫を探す隣で、根気よく枯れかけたパンジーを摘む仕事がいつの間にか年少児の仕事になっていた。そして、毎日コツコツ繰り返していく年少児の間で様々な発見、驚き、展開があった。それが、私や担任の予想以上に、長期間の継続となり、気づき、発見、進化を繰り返し様々な挑戦が年少児なりに繰り返されていった。



今年の年少児は何事にも意欲的で、一人の子どもの持つ興味に、心惹かれて「なに？なに？」とやってきては、保育者の援助の下、同じ場所で物事を深く探究する姿が多く、「なぜ？」「調べてみよう」「やってみよう」「できる（わかる）まで頑張る」という姿が強い。担任 2 人はその興味関心に向き合い、年少児なりに葛藤経験をしながら取り組めるよう一人一人に合わせた言葉をかけ、環境を準備しながら関わりをもっていた。保育者は子どもの言葉を大切にして、次の活動へと導けるような環境を整えていった。今回はそんな年少児の活動に長い継続が見られとても魅力的であったため、主任である私は、そこに焦点を絞り担任と共に関わりや観察を続けていった。その報告を行っていく。

②パンジー育てからはじまった年少児科学的な学び「色水からの発展」

～年長児からの引継ぎから始まった「不思議」いっぱい姿～

ここからは、日々の保育者の記録を中心に記載していく

・色水遊びの始まり

4 月 8 日：「色水遊びの始まり」

いつものように枯れたパンジーを摘んでいた U ちゃんが、手に着いた色に気づき「先生、てが ばっちくなった～」と困った顔で伝えにきたことが始まりだった。保育者は「きれいな色だね、水につけてみようか？」と言い、ビニール袋に水を入れたものを持ってきてパンジーを入れてみた。でも、それだけでは色がでない。首をかしげている U ちゃんに保育者が「モミモミすると色が出るかもしれない」と袋の上からモミモミとや



って見せると、色が出た。Uちゃんは、急に驚いた表情になり、仲良しのSちゃんに袋をもって伝えに行った。「やってみたい」とSちゃんがやってきて同じようにやっているのと色がでた。それをGくんにも・・・と次々と伝達が続いていき、その日の夕方には年少児のほとんどがビニール袋を片手にパンジーの花や落ちかけたチューリップや桜の花びらなどを入れて、水道に行き

水を入れて、保育者に袋の口を縛ってもらい、同じようにモミモミとしながら色水作りに夢中になっていた。

〈保育の振り返り〉

Uちゃんの一言から、自分の幼少の頃の色水遊びを思い出して伝えてみたところ、興味を示してやり始めた。一緒にやりながら手先を器用に使える子とそうでない子がいる事に気づいた。私は実際に子どもの見える位置でビニール袋に入った花びらをゆっくりとモミモミとやって見せて、色の出し方を伝えてみた。子ども達は大変興味深く、袋から水と花の感触を感じながら小さな手を一所懸命動かしていた。

今日はビニール袋が品切れになってしまったので、早速多めに購入し自由に使えるようにしてみようと思う。また、散歩でも野の花が摘めるような場所を探してみる。

4月15日（金）「新たな発見！！」

色水遊びは毎日続いている。年少児は全員が取り組み始めた。私たちは一か所にテーブルを設けた。水は年長児が「ペットボトルに入れておいたら行ったり来たりしなくてもいいじゃん」と通りがかりに伝えてくれた一言をきっかけに、そのように水や袋を置いた。一週間ほど続いたある日、Sくんが大きな声で「せんせ～！はっけんした～！」と興奮気味に緑色になった色水の袋を持ってきた。私は「えっどれで作ったの？」と聞くと「パンジーの葉っぱで作った」と得意そうに教えてくれた「きれいな緑色になったね」

S「これとっておきたい」というので、「どうやってとっておこう？」と聞いてみるとS「ペットボトルある？」私「そうか・・・あると思うよ一緒に探していこう」と廃材置き場に行ったところ、大き目の容器しかなかったがS「これでいい」と持って行き、保育者に下を押さえてもらい2人で色水を入れた。



その後も、様々な色水が作られていったため、私たちは、昨日飲んだジョアの空き容器を用意した。すると、自分の作った色水を入れてテーブルに並べ始めた。その後、色水セットのカゴを用意し、子ども達自身がやりたくなったらそれをテーブルに持っていき行うようになっていった。

〈保育の振り返り〉

毎日の繰り返りで、子どもの創造力が豊かになっているのを感じる。Sくんの色水を袋からペットボトルに移す際に苦労したので、ジョアの空き容器なら口が広いからと思い、たくさんあったので用意してみた。それにしてもよく継続し、集中している姿に驚いてしまう。今は子どもの思いに共感し、丁寧に付き合っていきたいと思っている。空き容器については、保護者にも呼びかけていく。

この後、保護者からたくさんの空き容器が届き、更に活発になっていく。

4月18日(月)「おはなのジュースやさん」

その様子を保護者にドキュメンテーションとして伝えると、家にある草花もビニール袋に入れて持ってくるようになった。しばらくするとSくんが「せんせい、これなんていうのはなの？」と草花の名前にも興味を持ち始めた。保育者は図鑑を用意して、子ども達と花と図鑑を照らし合わせながら見る時間も設けて行った。

来る日も来る日も色水作りに夢中の子ども達だったため、あつという間に空きカップはたくさん色水でいっぱいになったため、保育者は専用テーブルを用意した。これがまた、子ども達の興味関心を引き付けた。Sちゃんの「お店屋さんをやりたい」の一言がきっかけとなり、色水は



ジョアのカップから透明のペットボトルへと移され、木箱に並べて歩き回っていた。子ども達で「おはなのジュースやさん」と名付けて、販売が始まった。

園庭を歩き回り様々な年齢にアピールして手渡していくが、売切れる頃には自分で作った大事なものは、また集めて回っていた。



〈保育の振り返り〉

ちょっとした言葉がけがきっかけで、次々と遊びが展開していく。3歳児はもっと保育者の手助けが必要だと思ったが、やりたいと思った事には、結構自分で工夫して取り組む力があるのだと感心する。保護者も興味を持ち、子どもの話をよく聞くようになったように思う。色水を保管する棚を用意したことで、自分の作品をお迎えに来た父母や、園内の他クラスの保育者や子ども達にも伝える姿がある。毎日増えるので、2.3日して色が変わったころ「どうする？」と聞くと、迷うことなく「捨てる」と潔い。また作れることの方が楽しみの様だった。

・野菜色水（臭覚の刺激）

4月26日「野菜の色水」（臭いにおいの発見）

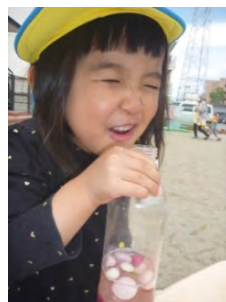
色水遊びは、益々活発になり、お店屋さんもずっと続いている。

私は家で赤カブを塩でもみ酢につけたところ真っ赤に色づいたため、早速園に持参し子ども達に、赤カブのみを渡してみた。するといつものように、水につけたが薄く色づいただけであった。A子は花びらの色水の経験から水につけておくと色が濃くなるということを知っていたので、「このままにしたい」と言う。保「じゃあ少しこのまま置いておこう」とつけておいてみたが2日たっても3日たっても色は変わらない。どちらかという、濁っていく。A子がフタを開けてみた「くさ〜い」何とも言えない匂いに思わず鼻をつまんだりしている。その様子を見たGくん、R子とやってきて、怖い物見たさではないが、次々と匂いを確かめては変な顔が始まり、この日は、赤カブの入ったペットボトルを持ち歩き、色々な保育者や他クラスの子ども達に「匂いかいでごらん」とニヤニヤしながら鼻先に付けて変な顔をする姿をみんなで笑い合っていた。赤カブは、そのままにしておく臭くなるということが分かったようでだった。この日から、手にするものなんでも目で見て、触れてみて、鼻を付けて匂いを嗅いでみることをするようになっていった。



〈保育の振り返り〉

私は家で赤カブを時々酢漬けにするが、子どもに伝えるなど考えもしなかった。しかし、子ども達の姿を意識して観察していくと、大人の日常生活の中に、子ども達の発見や驚きに繋がる沢山の材料やヒントがある事を感じる。もっとアンテナを張って、日々の生活を過ごしていくべきだと思った。また、臭覚も敏感で今回の「くさい」をきっかけに、何でも匂いを嗅いでいく子どもの姿に感覚の刺激も必要だと思った。



・調合を知る

5月2日(月)「酢との調合」

翌週、私が「見て、これね赤カブ“しお”でモミモミして“す”につけてみたの」とビンを渡してみた「え〜っあかい!!」驚く子ども達、そこで、保育者が「酢につけると色が赤くなるみたい」Aちゃん「やってみる」保「わかった、じゃあ明日酢をもってくるね」と言ってその日を終えた。



〈保育の振り返り〉

私たちは、色水についてインターネットで検索するとレモン水や重曹につけると色が変わる事を知ったため、早速レモン水を購入してみた。これが更に子ども達の興味関心を強めるきっかけとなった。ここから更に夢中になっていく子どもたちに保育者は、子どもが帰ってからの環境準備と自分たちも試してみることをやってみるようにした。

5月6日（火）

塩とレモン酢を色水セットカゴに用意して置いたところ、朝登園してきた A ちゃんが早速保育者と一緒にやり始めた。袋に塩をパラパラと入れ、よくもんで、レモン水を混ぜてしばらくつけておく夕方には赤くなっていた。興奮して「先生、あかくなった～！」と見せにきてくれたので「ほんとだ～」と言うと、またもや、たくさん子ども達が寄ってきて夕方同じようにして作って棚に並べ、翌日赤くなった赤カブを嬉しそうに持ち歩き、得意気に乳児さんのお部屋に見せに行く姿もあった。

〈保育の振り返り〉

ここで、子ども達は「しお」と「酢」を混ぜると色が変わる事を知り、益々興味が深まっていくのを感じた。私たちはボトルに「れもんすい」と書いて「みず」と一緒に用意したことで更に遊びが活発になっていった。

草花やカブの色水作りは、毎日続けられた。

ある日保育者は、子どもがティッシュペーパーの先端を色水につけてジーと見ている姿を見つけた。それを応用してガーゼ、めん棒、和紙を用意して、様々な草花で創った色水をガーゼや和紙に色付けしたり、めん棒で絵を描いたり、染めてみたらどうか？と考え提案してみたところ子ども達は、また飛びつくようにその場にやってきて試し始めた。

5月9日（月）「めん棒での絵」

今朝は朝の会で色水について話をした。色水で使った花びらをガーゼに包み和紙に模様が描けることや、その模様でレモン汁をつけためん棒でこすると紫や青色がピンクに変化する所を見られるようにした。保育者がやってみせると「ピンク色になった！」と驚く子どもたちだった。以前の赤カブの色水と比較し、濃い色を出すためには塩や酢が必要かもしれないねと伝えてもみた。そして、その匂いを嗅いだ F は「からい！」（すっぱいにおいのことだと思う）と大きな声を出していた。

戸外に出てすぐに色水をした。花びらをガーゼに包むところまでは出来たが、和紙にあまり色がつかず大きな色の変化は見られなかった。しかし、偶然容器に落ちた色水と色水と一緒に混ざり合い色が変わることに気づいた M ちゃんはそのからはずっと色水と色水の調合を行い、その遊びに夢中になっていた。また、カブの色水（塩もみ等していないもの）にレモン汁を加える子（S くん）が見られた。薄いピンク色がレモン汁を加えると濃い色になり、「カブの色水にレモンの汁を入れたら塩がなくてもこうなった。」と嬉しそうに見せてくれた。

〈保育の振り返り〉

保育者が提案した遊びとは別の方向に進んでいったが、子ども達は自分なりに考えて工夫したり楽しんでいた。色水での和紙への絵は、あまりうまくいかなかったが、色水にめん棒をつけて書いてみることも自体は楽しかったようで何度も何度もやっており、少しでも濃い色がつくと嬉しそうに保育者や友だちに報告する姿があったため、それはそれで、ひとつの提案として子どもも受け入れてくれたのだと感じた。また、色水と色水の

調合については、色が変わることに興味はあったが、色と色を合わせて何色になるというところについては、保育者の言葉を聞いてうなづく程度であったため、この先機会を見つけて、また伝えて行こうと思った。今後も子ども達の様子を見て、更に子ども達が楽しいと感じる様な提供するものなどを考えていく。



この後めん棒での染め書きが10日ほど続いた。つけて描くという事が楽しかったのか、書いては自分なりに名前を付け作品として飾ってほしいという要求があった。その活動も少し落ち着いた頃、次に保育者は重曹を用意した。すると更に発見の時がやって来た。



5月16日 「更なる発見」(重曹用意)(聴覚の刺激)

私たちは、次に重曹を用意した。まずはレモン酢でじっくり遊び、試してみてから次に行こうと「重曹」は少し日を置いてテーブルの上に用意した。「じゅうそう」と書かれた容器を見つけた R ちゃんが「これ(レモン水を入れたピンク)とこれ(重曹を入れた黄色)を一緒にしたい!!」と言い始めた。「やってみようか?」と私が言うと、大きなカップを持ってきて実験が始まった。2つを合わせると、泡が炭酸の様に噴き出してきた。とても驚いた R ちゃんは興奮して保育者に報告する「せんせ～ 泡だらけになったよ」「ほんとだ～」次々とまた友達がやってくる。「あっ泡が少し消えた」何やら音がする。耳をあてた R ちゃんは大きな声で「シュワシュワ・・・っていつてる」それを聞いた他の子ども達は一斉に集まってくる。僕も私もと調合を始め、耳を当てて音を聞く「僕のはパチパチっていつてるよ」「私のはシャワシャワだよ・・・」と発見をそれぞれの言葉にして伝えてくれる。すごい!!私も子ども達と共に聞いてみた。



〈保育の振り返り〉

私は、子どもは発見の天才だと感じた。その姿を見ていて、私の方がドキドキ、ワクワクしていた。明日もどんな発見があるか楽しみである。ここで更に音に敏感になっていった子ども達は、目で見て、触れて、匂いを嗅いで、音を耳で聞くことを行うようになっていった。



この頃になると、調合がペットボトルのフタになっていた。子ども達自身が考えたように、私達も驚いた。色々な物を並べて調合している姿は、まるで科学者のようであった。

微妙な色の変化にも「あつまた かわった」と敏感に反応しては何度も何度も液を入れてはその様子を楽しんでいた。お散歩に出かける時は必ず個人ポシットにビニール袋を入れて花を摘んでいっばいにして持ってくる。

5 月後半になってから、遊びに少し変化が見られた。自分の好みの色を作るために、摘んできた草花を選んでくる姿がみられるようになった。

黄色い色水を作りたいと思えば、タンポポをとってくる。オレンジを作りたいと思えばマリーゴールドを・・・と自分たちでこの色を作るという目的をもって活動し始めた。色にも興味を持ち、色の本に興味を持ち読んでいる子もいた。赤と青を混ぜると紫に、黄色と青を混ぜると緑になど・・・少しずつ混ぜ合わす色で中間色が作れることも、感覚としては感じている子ども達の姿もあり、私はそれを言葉で表すように関わった。しかし、今はその段階ではなく、とにかく色の変わる不思議をワクワクしながら体験している姿が印象的であり、年少児はそれで良いと感じた。時折興味を示した年長児が来ては、中間色を作ったりもしていたが、深く入り込む事はなかった。

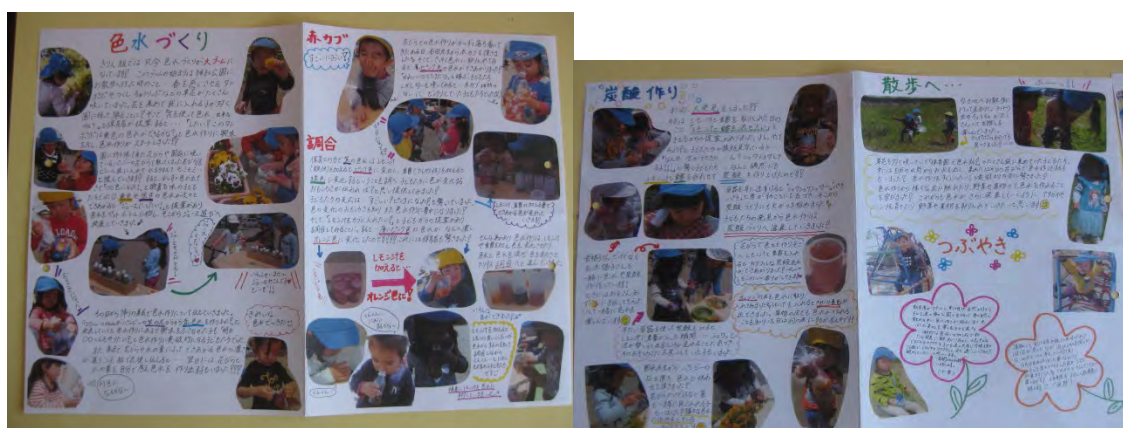
子どものワクワクする姿を見て、保育者も容器等の準備やテーブルの幅を広げたり、日陰の確保をしたりと色々と考えていった。6 月は、子どもたちなりに様々な液体の調合が盛んとなり、分量を減らしたり加えたりしながらの様々な発見に夢

中の子ども達であった。保育者も様々な子どもの発見や驚き、葛藤に一喜一憂しながら、過ごしていた。

保護者も様々な草花や家で食べた果物の皮などの提供もしてくれるようになった。

保護者には、以下のようなドキュメンテーションで園での保育の様子を伝えて行った。

・ドキュメンテーションを記載



上記の「色水遊び」ドキュメンテーションを見て 5 月半ばに、R ちゃんの母親からメロンの皮が届いた。昨日の夕食で食べた後どうしてももっていくと袋につめたそう。子ども達は、「R ちゃんありがとう」と言って続々と皮をモミモミしていく。

その後食育で「フルーツポンチ」を作った際も、自分たちから「皮を取っておいてください」と給食の先生に伝え、遊びの時間に持ちに行きモミモミ・・・

果物の匂いはいい匂いだったので、ずっと袋に鼻を押し当てている子どももいた。そのうち T くんが「そうだ 給食の先生に他の皮をもらおう」と言葉にするや否や給食室へ・・・給食の先生からその日の野菜等でいらなくなった皮をビニール袋に貰いに行くようになった。色水遊びのレパートリーは更に増えた。野菜の皮でも色水ができることを知っていく事になった。バナナや桃の皮は時間や日が経つと茶色の色水になる。ことも実際にやってみて気づいていった。

・飲める色水（味覚の刺激）

5月終わりに、別の保護者から提案があった



5月27日（金）「飲める色水」（味覚の刺激）

朝、Aちゃんママが小さい頃飲んだ「マローブルー」というハーブを教えてくださいました。

お湯を入れてしばらくすると色が変わっていく飲める色水とのこと、ハーブとしても扱われているようである。

「すごい！！」更に発見が楽しみになり早速「マローブルー」を購入し、子どもの前で透明のピッチャーに入れて作ってみた。

最初はとても不思議そうに見ていたが、「これは飲めるよ」というと、「わ〜い」と大喜びであった。

色が変わっていくまでには時間がかかったが、子ども達はじーっとその経過を見ている「あっ変わった！！」「あっまた変わった！！」

その後、コップで飲んでみると、あまりおいしくなかったようで「もういい〜」と言う子どもがほとんどであった。その後、レモン水を加えて色の変化を楽しんだり、砂糖を加えて味の変化を知っていった。M くんが「じゅうそうは？」というので「じゅうそうはのめないから、外でやろう」と伝えた。



5月30日（月）（飲める色水2）「ローズヒップ」と「マリーゴールド」

今日は保護者からローズヒップとマリーゴールドが届いた。子ども達は「〇〇色になる」と予測して言葉にしている。

保育者がピッチャーにお湯を入れると、集中して見ている。入れ終わると自然に数を数え始めた「1.2.3・・・」と段々色が出てきた。20数え終わるとローズヒップは赤茶色に、マリーゴールドは黄色になった。

図鑑を見せて赤茶色の実から出来ている事を伝えると不思議そうに何度も見ている子どももいた。ハーブティーと言う名前も覚えると同時に湯を入れてしばらく待つと色

ができることも理解したようであった。味は子ども達には不評で「まずい！」と言っては少しずつ飲んでいく。

〈保育の振り返り〉

「飲める色水」私たちは考えた事もなかった。確かに飲み物には色がついている。遊びの中の色水という事ばかり考えていたので、保護者からの提案は、目から鱗の世界であった。これから先「飲める色水」を提供して、飲める、飲めないも知らせるようにしていく。

この後散歩に行った先で「マローブルー」の花を発見したSくん大興奮で「せんせい～これマローブルーじゃない？」と教えてくれた。「ほんとうだ・・・」いつも行っている散歩の場所だったが、全く気付かなかった。興味関心が深まると、どんどん長くなっていく子ども達のアンテナがあるようだった。それを写真にとってお部屋に貼った。お花も少し摘んで、袋に入れて色水を作っていた。それから散歩で、マローブルーの花摘みが目的になっていく期間も続いた。

・飲める色水と飲めない色水の違い

「飲める色水」を保護者にドキュメンテーションで伝えたところ、今度は保護者から果物や野菜の差し入れが沢山届いた。子ども達は「食べたい」ではなく「飲める色水にしたい」と言うようになった。そこで保育者はジューサーを用意しジュース作りを行った。そこでMちゃんがひとこと「皮は飲めない色水にできるね」というので、皮と実を分けて袋に入れる様にした。皮は外で使うというので、腐敗が心配だったのでビニールに入れて冷蔵庫に取っておいて翌日モミモミの色水遊びに使用した。

こうなってくると、見る物全て「色水にしたい」とあちらこちらから持参が始まり、色水作りが盛んに繰り返された。「飲める色水」と「飲めない色水」と言葉にして分けるようにもなった。



6月20日(月) 飲める色水 3

「野菜ジュース」と飲めない野菜の色水

今日はトマトジュースを作った。保育者が「何色になるかな？」と聞くとみんなで「あか



～」と言う。一人一人やってみると、トマトが赤いと予測したのに「ピンク」だったことに驚いていた。その後、戸外で野菜の色水を作った。

袋の中に好きな野菜をつめて水を入れて揉んでいく。

Tくんが「今日はトマトは赤だね」といった。Rちゃんは「人参はオレンジだ！」とそれぞれ野菜の色水作りで不思議を感じていた。

〈保育の振り返り〉

子ども達は赤いトマトがピンク色になることに驚きと喜びを感じていた。私達も驚い

た。トマトの嫌いなYくんも自分で作ったジュースは飲み切っていた。
それもまた不思議な光景であった。

この数か月間の子どもの作った色水の発見を保育者は、一冊の本にまとめ、子ども達がいつでも手に取ってみる事ができるようにした。そうすることで、登園後、本を持って
いってはそれを見ながら自分たちで調合する姿があった。まだ文字は読めないが、写真
を見ながら一生懸命調合を繰り返していた。



・新しい道具 1、2

6月4日(月) 新しい道具 1.「じょうご」

今日も朝から色水作りに夢中な子ども達であった。ペットボトルに移す際、こぼれてしまう子どももいたので、じょうごを準備して置いてみた

お散歩にも行き、様々な花を摘みビニール袋に入れて持ち帰り、即色水作りとなる。今は

どこに行っても、目的は色水を作るために何かを摘んでくるということになっている。色水の袋が沢山たまったところで、じょうごの名前と使い方を伝えたところ、とても興味を示し、使い始めた。用意したじょうごが2つしかなかったため、順番を待つ姿があった。お迎えに来たお母さんたちにも「じょうごをつかった」と少し得意気に話す子どもの姿もあった。



〈保育の振り返り〉

じょうごを用意したことで、色水遊びは、色水移しのような遊びへと変化していった。じょうごを使ってペットボトルに移す際に、ちょっと持っていると友だち同士で協力する姿

も時折見られたが、基本的には一人でコツコツ行っている姿が多い。今は自分のペースで納得いくまでが良いと思っている。多くの子どもが使いたくて順番待ちになってしまったので、じょうごは、もう少し多く用意すればよかったと反省である。

この後じょうごは、5つに増やした。子ども達は思い思いにじょうごを使って袋やカップの色水をペットボトルに移していった。しばらく夢中で使っていたが、一週間程経ち、使いこなせるようになると、広い口から狭い口へと流れおちていく水を見て不思議そうにしている子どももいた。子どもなりにその成り立ちに漠然ではあるが、気づいてきたように感じた。

7月12日(火) 新しい道具2. 「すり鉢、おろし器、ザル」

遊びの中心はプールへと移ったが、時間が空くと色水は続いていた。

7月は赤しそが実り、野菜とともに今日も色水を行っている。

すり鉢やおろし器、ザルも用意してみた。子ども達の「やってみたい」はずっと続いている。色々な道具を使って色水ができる事を更に知っていった。

〈保育の振り返り〉

今日は更にたくさんの道具を用意したところ得意そうに使いこなす子ども達がいた。プール遊びが始まって、色水で遊ぶ時間も少なくなっていたが、道具を新たに加える事で、また、意欲が高まっていった。すり鉢は室内でゴマすりなどに使用している為、上手に使いこなせていた。おろし器は怪我をしないよう、危険のないものを選んだ。



7月~8月前半は、プール遊びの合間に色水遊びが行われていた。陽射しも強かったので、活動は短時間であったが、狭い場所でも数名の子どもによって継続していた。

・押し花とたたき染め

8月10日(水)「押し花」を知る

春に巻いた朝顔の花が咲き始めたのが6月の終わり、朝顔を摘み色水を行ってみたが、あまりいい色がでなかったため、私達は何かの形で残したいと思い、花ならば「押し花」もあるという事を伝えようと考え、本を用意して紹介した。

その本を見ていたMちゃんが「これ やりたい」と言った。「押し花だよ」と名前をつたえた後、花が崩れないように取る方法を伝えたところ、理解して丁寧に摘んできた。それを見ていた子が次々とやってきて、朝顔を摘み始めた。力加減で敗れて泣いてしま



う子どももいたが、2回、3回と行ううちに上手に詰めるようになった。

次に、はさむ工程が難しいようであったが、保育者に手伝ってもらいながら、一人一人ティッシュの上に花びらを広げておき、ベビーパウダーをつけてはさみ、新聞紙の間に入れて上から紙芝居を乗せた。やっている間はとても

慎重で丁寧に来ていた。はさみ終わると「もうできた？」と聞いてきたので、出来上がりには、少し時間がかかる事を伝え、次の「明日ね」とカレンダーに○をつけて伝えたところ、「わかった」と、外に出て行った。



8月12日（金）「押し花のキーホルダー」

子ども達のはさんだ押し花ができあがった。毎日のように、「もうできた？」ときいていたので、「できたよ」と伝えると嬉しそうだった。

キーホルダーになることやポストカードになる事を伝えると、ワクワクした表情になり、その説明をよ〜く聞いていた。そして、慎重に花びらに触れて画用紙の上に置き、保育者にラミネーターをかけてもらうと不思議そうな表情で中から出てくるのを見ながら待ち、自分で作った押し花がプレスして出てきたのがとてもうれしいようであった。キーホルダーはその後自分でビーズを付けて作り、「ママにあげる」「かばんにつける」など自分なりに決めて、大事そうに持ちかえった。ポストカードは自分の書いた絵とともに画用紙に貼りつけて、ラミネーターへ。これも大事そうに持ちかえった。

その日から摘んでくる花を次々と押し花にしていく子ども達の姿があった。



〈押し花、キーホルダーづくりの振り返り〉

朝顔はあまり色が出なかったなので、感動が薄くなってしまったりしている事もあり押し花を提案してみる事にした。出来る限り自分で作ったという感覚が味わえるように作業の内容を考えた。一人ずつ、順番の作業となってしまったが、押し花づくりの期待から、しっかり並んで待つ姿があり、その先に目的があることの大きさを感じた。

押し花のイメージが、まだできていないと思ったので、翌週にラミネートしてキーホルダーとしてそれぞれの手元へ行くようにし、押し花づくりの一連の流れが結びつき、

作った達成感や喜びを得られるようにした。

子ども達は「もっとやりたい」「ラミネーターやりたい」と言っていたので、また新たに押し花づくりを開始する。2回目は手慣れた様子でベビーパウダーを使う子どもも多くいた。今後は他の作品作りも考えていこうと思っていたところ



キーホルダーを見て「これおじいちゃんが本に挟むやつにしている」という言葉がきかれたので「しおり」を敬老の日のプレゼントにした。「ラミネーター」という名称も覚え、押し花をしては「ラミネーターかけて」と言ってくる子ども達であった。機械から出てくるプレスした押し花を不思議そうに見ながら出来上がりを楽しみにしていた。摘んだ花がきれいにとっておける方法を知った。

秋も近くなった8月後半には散歩で発見した草の茎ををぼきんと折った瞬間に、茎から出る白い汁を発見したAちゃんはそれを「ミルク」と言って、近くにあった石に絵を描き始めた。めん棒遊びで覚えたことだと思った。今までの遊びの記憶を応用して色々な発想が生まれているのを感じる瞬間であった。



9月1日(木) 「たたき染め」

更に朝顔が、咲き続けていたため、次は「たたき染め」を伝えてみた。テーブルに障子紙半分に折り間に朝顔を置き、その上にフェイスタオルを二つ折りして乗せて、近くにある石で上からたたいてみる。その後そーっとタオルを取り、上になった障子紙をめくると、きれいにたたき染めが出来た。最初は一か所だけが色がついてしまったり、全くつかなくなったり、力が強すぎて破けてしまったりと

色々失敗はあったが、何度も挑戦して、きれいな朝顔のたたき染が仕上がった。子ども達は、めげることなく、「もう一回、もう一回」と挑戦を繰り返し、程よい力で出来るようになっていった。

出来上がると、少し乾かす為に洗濯ばさみで止めるのだが、その後は「あっそうだ!」とつぶやき、たたき染に使った朝顔の花びらで色水へと利用している子ども達の姿があり、私たちは驚いた。



〈保育の振り返り〉

子どもは今覚えた事だけに興味を示して関わるわけではなく、今までの経験を、覚えていて遊びと遊びをつなげていくこともできるのだと感心した。たたき染めは、始めはうまくいかなかったが、繰り返していくうちにコツがつかめたのか、3枚目くらいからは上手にできるようになった。後で気づいたのだが「できない」と頼ってくる子どもがいなかった。次はフロタージュ(こすりだし)にも誘ってみようと思っている。

5.考察に基づく課題と今後の方向性・計画

色水遊びを始めてから、既に6か月が過ぎようとしている。年少児がここまで夢中になって取り組む姿は今年度が初めてであった。私たちは子どもの興味関心と向き合いながら、それが継続していけるよう、様々な方向から考え準備を整えていった結果、長期に渡って五感をフル回転させながら、繰り返し集中する姿に出会えた。それが「科学する心」の第一歩だと感じた。

今回の活動の継続に当たって子ども達は草花の感触や色、形を知りビニール袋の上から手で揉んで色水を作ることに興味を持ち繰り返し行った。次に、水、レモン水(酢)、重曹、色水同士の調合の不思議を知る事になった。更に飲める、飲めないの分別に加え、じょうご、すり鉢、おろし器、ザルなどの用具を使い、色々な方法で色水を作り出していった。そして調合や用具や道具を夢中になって使うという経験を繰り返し行い、ある程度自分でコントロールして思い通りのものが作れたり、道具の使用が出来るようになっていくと、ある瞬間から液体の量を調節して試してみたり、その道具の特製を知ろうとする姿に変わっていく姿が見られた。このことについて

神長(2008)は、²⁾「幼児期は好奇心旺盛な存在であり、あるものに興味をもつと過ぎに触れたり、試したり、確かめたりして、対象にかかわっていくという。そして、好奇心や、探究心をもって対象と関わり、関わりを深めることを通して、次第に物の特製や物事の法則性に気付いていきます。こうした首位の環境と関わる体験こそが、まさに幼児にとって科学的な体験の一つであり、思考力の芽生えを培うことにつながっていくのである。すなわち幼児期においては、環境と関わる体験こそが、まさに幼児にとって科学的体験の一つであり、思考力の芽生えを培う事に繋がっていくのである。」と述べている。

年少児としてはそれが、ただ漠然と不思議そうに眺めているだけであったり、繰り返すことで偶然にできあがるものに満足したり、様々な動作の繰り返しをしきりに行っている姿が多く見られる段階である。しかし、それらを繰り返していくうちに、目的をもって作る姿も見られるようになった。また、飲む活動に繋がることも楽しかったようで、「色水遊び」の広がりを感じたのではないかと思った。これから年中児となる子ども達の遊びがどのように発展し、主体的な姿に変わっていくか更に楽しみである。今回の継続に当たって強く感じたのは、子どもの「科学する心」が継続していくためには、保育者である私たち自身が、目の前の子どもの姿をしっかりと見て、その興味関心に向き合いながら、子ども達の思いを受け止め、考察し次の展開へと導く準備が大切である。それには色々な角度から考え、子ども達にとって最適だと思われる環境設定を行う必要性を感じた。また年少児は保育者の関わりが多く必要ではあるが、今後は少しずつ子ども達自身で、様々な考えを出し合い工夫していけるような主体的な姿に変われる様、保育者の引き際も意識した保育も考えていく必要がある。子どもが「なぜ?」と感じ、試行錯誤しながら「やってみたい」という意欲や実行する態度に繋がるよう今後も実際の体

験や経験を豊かにして、子どもの好奇心や探究心につなげ、思考力の芽生えを養う保育を続けていきたい。

【引用文献】

- 1) 改定版・保育所保育指針（2008）
- 2) 無藤 隆（2008）：「ここが変わった新幼稚園教育要領—改定のポイントと解説」、チャイルド本社、26 頁。

研究代表者	主任	石田	幸美
執筆者名	主任	石田	幸美
協力者	保育士	千葉	佳織
	保育士	西野	佳奈